



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



## Maughamと常識

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 豊国, 孝 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/3323">http://hdl.handle.net/10258/3323</a>

# Maugham と 常 識

豊 国 孝

## Maugham and His Common Sense

Takashi Toyokuni

### Abstract

This paper is an attempt to elucidate two problems according to the development of his novels: "What is the relation between Maugham and common sense?" and "What is Maugham's common sense?"

Maugham searched for three values, Truth, Beauty, and Goodness, throughout his novels. Finally he arrived at the conclusion that goodness is the only value in this world of appearances, and that common sense as well as *bona fides* is essential to "right action" in which goodness, the only reality, is shown. Maugham valued common sense not only in his works, but also in his actual life.

Why did Maugham attach so much importance to common sense?

There were two natures in Maugham, an artist to be a *homo liber* and a man of common sense to repress the former. Gradually, as he grew older, the man of common sense got the better of the artist because he was destined to be a successful writer. His attachment to common sense is, therefore, a kind of self-justification.

What is Maugham's common sense?

Philosophically, his common sense can be defined as "sens commun" to perceive Not-self which exists different from Self as Claude Buffier defined. Maugham praises soundness, commonness, constancy, and especially practicality in common sense. He regards common sense as "good sound practical sense" which forms the foundation of man's action.

However, on the other hand, common sense can be regarded as a conservative opinion, or prejudice. Maugham's overestimation of common sense prevented him from burning with "hard, gemlike flame" as an artist. Here, his common sense set definite limits to Maugham and his works although it gave them a charm.

幼くして両親を失い、心の狭い牧師の叔父の家に預けられた Maugham はキリスト教の神に深く失望する。Maugham が求めるのは、嫉妬深く自分を

信じないものを滅ぼしてしまう怒れる神ではなく、人間の愚行や誤りを寛大に赦す人間味をもった神なのである。

For my part I cannot believe in a God who is angry with me because I do not believe in him.

I cannot believe in a God who is less tolerant than I.

I cannot believe in a God who has neither humour nor common sense...

The only God that is of use is a being who is personal, supreme and good, and whose existence is as certain as that two and two make four.<sup>1)</sup>

(私としては、私が信じないからといって腹を立てる神を信じることは出来ない。私は私よりも寛容の心をもたぬ神を信じることは出来ない。私はユーモアや常識をもたぬ神を信じることは出来ない。……)

唯一の役に立つ神は人間味をもち、至高で十善を兼ね備えた存在であり、しかもその存在が $2+2=4$ のようにはっきりしていなければならない。)

Maugham の主張する神は人間に理解の出来る神、すなわち常識とユーモアの精神をもった神なのである。

このように Maugham は常識を非常に高く評価しているわけであるが、私は、ここで、彼の小説の展開に従い、常識と Maugham の芸術と人となりが如何なる関係をもっているのか、また Maugham のいわゆる常識とは何であるのかを解明してゆきたいと考える。

なんとすれば、それが Maugham 文学、また彼その人と不可欠なものであるからである。

## I.

Maugham は第一作 *Liza of Lambeth* では徹底したリアリズムの態度をとり、貧民街 Lambeth を愛し、そこに生活している人間像をあるがままに描写する。物語の進展はキャラクターの対比と環境から生ずる必然的な結果である。

主人公 Liza は、ふとした偶然から妻子ある男 Jim と愛し合うようになる

が、その燃えるような愛も次第にその<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>に<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>がさを増す。

It was November. The fine weather had quite gone now, and with it much of the sweet pleasure of Jim and Liza's love.

When they came out at night on the Embankment they found it cold and dreary; sometimes a little fog covered the river-banks, and made the lamps glow out dim and large; a light rain would be falling; which sent a chill into their very souls; ...<sup>2)</sup>

(今は11月であった。すがすがしい時候はもうすっかり過ぎ去り、それとともに Jim と Liza の恋の甘い喜びも大方失せてしまった。夜、テムズ川の河岸通りへ出てみると、そこは寒く、もの淋しかった。時には薄い霧が河岸を蔽い、街灯のあかりをぼんやりと大きく見せていた。小雨がよく降り、二人の心のなかまでも冷えびえさせた。)

やがて、二人の恋は Liza の死によって終止符を打たれることになるが、それは、たくらみを知らぬ素朴な娘 Liza が妻子ある男を愛したために刈り取らなければならなかった当然の帰結であった。そこには真実を追求する作者 'clinical' な目があるだけである。

こうした Maugham の態度は *Mrs. Craddock* でも同様であり、「人間とは何か」という設問を客観的態度で追求してゆくのである。

この小説でテーマとなるのは、Bertha という女性の情欲とそれからの解放の歴史である。

Love to her was a fire, a flame that absorbed the rest of life; ...<sup>3)</sup>

(愛は彼女にとっては火であり、その他の生活をすべて飲みこんでしまう炎のようなものであった。)

彼女の愛は、相手も、また彼女をも捕える情念の絆であり、破壊力をもった愛なのである。Maugham は、こうした愛のは<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>かな<sup>・</sup><sup>・</sup><sup>・</sup>さとその破壊性を、また、それからの解放を描いているのである。

こういったテーマは、*Of Human Bondage* にいたり、見事にその花を開くことになる。

自伝的色彩の強いこの小説は、彼の分身 Philip Carey の遍歴、すなわち、

自己発見、自己認識、そして自己解放の物語である。

Philip は幼い時に両親を失い、牧師の叔父夫婦に育てられるが、生来の内向的性格と ‘club-foot’ という障害のために、彼の周囲の外的世界に順応出来ない。それが要因となり、キリスト教に疑問をもった彼は、やがてそれを一つの因襲として捨て去る。Paris で彼が出会った老いぼれ詩人 Chronshaw も、そういった彼の自己発見、そして認識のプロセスにおいて重要な役を果していることになる。

“The term vice and virtue have no signification for me. I do not confer praise or blame: I accept. I am the measure of all things. I am the centre of the world.”<sup>4)</sup>

(「悪という言葉も善という言葉も僕にとっては無意味であり、僕は賞めもしないし、けなしもしない。ただあるがままを受け入れるだけさ。この僕が万物の尺度であり、この世界の中心なのだ。)

勿論、こうした Chronshaw の自我主義は Maugham 自身の唯物論的思想に裏づけされたものである。Philip にとって存在するのは事実そのものであり、それは宇宙の進化の過程において、偶然によって支配されるのである。

宗教から解放された Philip は芸術のとりこになり、Paris で絵を勉強するのであるが、この芸術も彼の探し求めるものではない。彼を芸術から解放するのは、Fanny Price という画学生の死である。才能のない彼女は、食事代を絵具代にかえてまで芸術の道に専心するのであるが、ついに首をくくって自殺してしまう。彼女の部屋の机の上には Philip の名前をいくつも書いた一枚の紙きれが残されていた。

彼女の悲劇は、自分の才能を見極めることの出来なかった自己認識の欠如であるが、とりもなおさず、常識というプラクティカルな知恵をもたぬ人間の悲劇である。それは彼女のなかに芽発えた Philip にたいする愛までもむしり取ってしまった。

芸術から解放された Philip は Mildred というエゴイステックな女性との愛のとりこになる。Mildred は最後には、コール・ガールにまでなり下り、破滅の道をたどるのであるが、彼女の悲劇も情欲のとりこになり、我執を捨てることの出来なかった人間の悲劇である。彼女も、やはり健全な常識をも

たない人間である。

Philip は Mildred に捨てられ、苦しみのうちにペルシヤ絨緞の哲学、人生は無意味であり、それをいかに美しいボタンに織るかに価値があるという一種の審美的人生観を得る。この人生観は、ある意味で、彼がどんなにもがいても人間の絆からは抜け出すことは出来ないという現実の認識に根をおいた一つのニヒリズムであるということが出来よう。

こういった考え方は世紀末的審美主義の香りが強いものであるが、ここで忘れてならないのは、Philip が人間の善意の美しさを発見したことである。

There was one quality which they had that he did not remember to have noticed in people before, and that was goodness.<sup>5)</sup>

(彼等には彼が以前には他の人々にあるとは気づかなかった一つの美点があった。それは善意であった。)

最後に、Philip は Sally という健康で善良な女性と平凡な結婚をすることで、ハッピー・エンドとなるわけであるが、これはアンチ・クライマックスであり、多分に Maugham 個人の希望的な結末と云えよう。だが、一面作者の平凡さ、健全さといったものに対する新たな認識とも考えることが出来る。

フランスの画家 Gauguin をモデルにした *The Moon and Sixpence* では美の奴隷である Strickland の芸術至上主義が中心となり、Maugham は「究極の人間」の姿を追求しようとする。

この時代は Maugham の 'art for art's sake' の時代であり、この美の追求は *Of Human Bondage* の模索的な態度から抜け出し、一つの主張となる。Maugham の常識は、ここでは、蔭をひそめているといってもよいが、Strickland は自分に適した法律を自から作る強者であり、超人的存在である。だが、例えば、Strickland が "A woman can forgive a man for the harm he does her, but she never forgive him for the sacrifice he makes on her account."<sup>6)</sup> 「女という奴はね、男から受ける傷なら宥すことが出来るもんだが、自分のために男から犠牲行為を受けるというのは決して宥せないものなんだよ。」と云うとき、この逆説的なセリフのなかにかえって常識人

Maugham が顔を出しているようにも考えられる。

一方、この Strickland に捨てられ、自殺する人妻 Blanche は情欲にとり憑かれた所有本能の強い女性である。彼女は弱者である自分を見抜くことが出来ず、我執を捨てきれずに破滅してゆくのである。

*The Painted Veil* も、やはり、審美主義的傾向の強いもので、人生を完全な芸術作品であるとする見方である。

“Of all these the richest in beauty is the beautiful life. That is the perfect work of art.”<sup>7)</sup>

(「これらすべてのなかで一番美しさに富んでいるのが美しい生活ですよ。これこそ完全な芸術作品ですよ。」)

ここで描かれるのも、我執の恐ろしさと没我の美しさとの対比である。主人公 Kitty Fane は尼僧達の没我、いわば、善意の美しさにうたれて、愚昧な自分は過去に葬り、自由な解放された人間として、人生を生きるべきであるという悟りに達する。

これに対し、Kitty の浮気で嫉妬に狂った Walter は善意も才能も持ちながら、自意識の過剰と傷つけられたプライドゆえに破滅してゆく、彼に一片の素朴な実践的知恵とユーモアと寛容の精神があれば、彼は救われたのである。

これが *Cakes and Ale* になると、作者は主人公 Rosie のもつ善意と同時に、プラクティカルな知恵にたいして手ばなしで賞讃する。

Rosie は、もと酒場の女給で、小説家 Edward Driffield と結婚するが、George Kemp という田舎の旦那衆といった粗野な男と馳落ちし、George 旦那の死後はその遺産で、悠悠々々自適の生活を送っている女である。

こういった性的に放逸で一目救いようのない人間を追求してゆき、そのなかにひそむ眞の人間性、いわゆる ‘reality’ を求めてゆくのがこの小説の主要なテーマである。

たまたま、狂言廻しの役をつとめる「私」が彼女に嫉妬すると、Rosie は次のように云う。

“It’s so silly to be fussy and jealous. Why not be happy with

what you can get? Enjoy yourself while you have the chance, I say; we shall all be dead in a hundred years and what will anything matter then?

Let's have a good time while we can.”<sup>8)</sup>

(「いらいらしたり、やきもちなど焼いたりするのはお馬鹿さんよ。あなたはあなたの手に入るものに満足していれば、それでいいじゃないの。楽しめるうちに楽しんでおくものよ。百才までだれも生きられるわけのものでもないでしょう。死んでしまえばそれまでの話よ。出来るうちにせいぜい面白くすごすことよ。)

こうした彼女の ‘give and take’ 式の刹那的生き方の根底には、人生は無意味であるという Maugham 自身のニヒリズムがあるわけだが、彼女の場合は、それを、ことさらに一つの人生観とか思想とか呼ぶよりは、この苦しみ多き世界を生き抜いてゆくための一片の実践的知恵であると考えた方がふさわしいように思われる。こうした「生活の知恵」は、Rosie の場合は、意識的につちかわれたものではなく、彼女が生を生きるために、自分の体験を通して次第に養なわれてきたものであろう。

Maugham は Rosie を見せかけや偽りの多い上流階級や知識階級に対比された庶民階級、すなわち ‘appearance’ に対比された ‘reality’ として描き出すことに成功した。<sup>9)</sup> Maugham 自身の Rosie に対する追想で始まり、限りなき憧れで終るこの小説は、善意と常識が人生を生きてゆくのに不可欠なものであるという作者自身の認識でもある。

*The Moon and Sixpence* において、芸術を人生に先行させた観がある Maugham は、ここにおいて、人生に、しかもその平凡さにしっかりと腰をおろしたことになる。

*The Narrow Corner* では、テーマは神秘思想の探究と、やはり善意の礼讃である。

Erik は教養もあり、無頼漢の Fred を心服させるほどの善意の持主であるが、彼を自殺に追いやるのは、現実からかけ離れた idealism と現実を批判、分析する能力の不足である。Maugham は彼の善意の美しさを無批判に讃美するのではなく、彼の実践的知恵の欠如を鋭く指摘する。



同様に、ヴェダンタを研究している学識豊かな Frith を二流の人間として、その発展を妨げるのも実践の哲学と意志力の不足である。

これに対し、女主人公 Louise は現実に対する共感と常識をもっている。だから、彼女の浮気のために恋人の Erik が自殺したときも、気落ちせず、彼女自身の夢の実現のために強く生きてゆくことが出来るのである。

ここでの決論は次の一語につきる。

“A little common sense, a little tolerance, a little good humour, and you don't know how comfortable you can make yourself on this planet.”<sup>10)</sup>

(「ほんの少しばかりの常識と寛容の心と健全なユーモア、これだけあればこの地上ではけっこう気楽にくらしてゆけるものですよ。)」

*Theatre* において Maugham が描こうとするのは、舞台女優 Julia の所有欲にもとづく恋愛からの解放と、彼女にとって芸術こそ、この見せかけの世界での眞実であるという認識である。

They say acting is only make-believe. That make-believe is the only reality.<sup>11)</sup>

(演技はみせかけにすぎないなんていわれているけど、そのみせかけこそ唯一の眞実なんだわ。)

Julia は *The Moon and Sixpence* における Strickland の変形とも考えられるが、人間臭さに満ちている点で、一步前進している。

*Christmas Holiday* では、主人公 Charley の住んでいる平穩で上品ではあるが、平凡で単調な常識人の社会と、生まれつきの犯罪者 Robert や、その妻で夫の罪をあがなうために売春婦に身を落した Lydia や、恐怖政治を夢みている社会革命家 Simon といった異常な人間の呼吸している社会、この二つの社会の対比の面白さがテーマとなる。

善意の持主である Charley はクリスマスの休暇で Paris にゆくことになり、人生の深淵をのぞき込み、彼の安易で幸福な常識的世界が根底から覆されるのである。Maugham は、ここでは、常識的なものより、むしろ異常なものに分を与えているように思われるが、これは彼が、なかなか世紀末的審

美主義から抜けきれないためであろう。一面、常識人 Maugham の自分自身に対する反逆とも考えられよう。

だが、ここでも作者は Charley のもつ 'just pure, simple, stupid goodness'<sup>12)</sup> (全く純粋で、単純で、馬鹿げたお人好し) をシニシズムを混えずに描いている。彼の善意への信頼は根強いものである。

*The Razor's Edge* において、主人公 Larry によって追求されるのは、バラモン教における宇宙の霊であり、また、善につながる「正しい行為」なのである。

Larry は *The Moon and Sixpence* における Strickland の変身と考えられるが、前者が神という観念にとり憑かれた男であるのに対し、後者は芸術にとり憑かれた美の奴隷なのである。両者とも Maugham の理想像であり、共に人間性に乏しく現実離れしているが、違いは Strickland に対し Larry のもつ底抜けの善意である。

Larry は戦友の死に直面し、神に疑問を抱き、許嫁 Isabel の求愛を退けて、「何故、この世に悪が存在するか」という疑問にたいする解答を求めて遍歴の旅に出る。彼はキリスト教の神にも、仏教の輪廻説にも、また、ラマクリシナの慰みものとして悪をつくったという神にも、彼の求める悪の存在理由を見つけることが出来ない。

“I wanted to believe, but I couldn't believe in a God who wasn't better than the ordinary decent man.”<sup>13)</sup>

(「僕は神を信じたいと思いました。でも僕にはごくありふれたたしなみのある人よりもたいして善良でもない神をどうしても信じることは出来ませんでした。」)

彼が信じることの出来る神は、常識をもち、全能と十善を兼ねそなえた神なのである。彼がインドの瑜加行者のところで到着した結論は「この世で絶対者が姿をあらわす場合、悪は善に本質的に伴う相関物である」ということである。

こうして、ある意味で、現実と和解した Larry は人間の幸福は精神に存するという悟りを開き、物質万能のアメリカで変り種の多いといわれるタク

シーの運転手をしながら、善に導かれる生活を送ろうと決心する。

“It was not for me to leave the world and retire to a cloister, but to live in the world and love the objects of the world, not indeed for themselves, but for the Infinite that is in them.”<sup>14)</sup>

（「僕にとっては、この世を棄てて、僧院で隠遁生活をおくることはふさわしくないのです。僕にふさわしいことはこの世の中で生活し、しかもこの世のなかのものを愛すること、それも、そのもの自体のためではなく、そのものの中にある無限のもののために愛することなんです。」）

この結末は、Larry の人間的魅力の乏しさのため、説得力の弱いものとなっている。

それはさておき、悪と善が現実に共存するという事実の認識に根をはった Larry の生き方は、理想主義者である彼を、Erik などの落った悲劇から救うことが出来たのである。彼の強みは、彼の善意、すなわち、没我の精神、自己と現実との認識、そして実践的な人生の知恵である。

これに対し、彼の幼な友達 Sophie の転落と死は、豊かな感受性と善意をもちながら、人生の悪を正視することが出来ず、自己を傷つけることにより、その償いをしようとする誤った自己犠牲の悲劇である。

こうした *The Razor's Edge* における善と悪、すなわち、神の問題、そして「人間いかに生きるべきか」の主題は *Catalina* においては、信仰という形をとって示される。

善良で信心深く、しかも美しい乙女である Catalina は、ふとした事故で足をいため、不具になる。ある日、彼女が祈っている最中に聖母マリアが現われ、彼女の足は Don Juan de Valero の三人の息子のうち、最も神によく仕えたものによって直されるというお告げを受ける。しかもその奇蹟を行なうのは、厳しい禁欲と絶えざる祈禱の生活をおくっている名僧 Don Blasco でも、剛勇の誉れ高い将軍 Don Manuel でもなく、パン屋の Martin なのである。

Martin は決して賢くも、教養もあるわけでないが、妻子を愛し、両親を敬い、神を信じ、生きることを楽しんでいる善意にみちた平凡な一市民である。

神が奇蹟を行なわせる人間として、Martin を選んだのは、神が常識とユー

モアのセンスをもっているからである。

Maugham の代弁者 Domingo は、次のように説明する。

“The way of God are inscrutable and it may well be that in His eyes by his industrious, honest life, his loving-kindness, his innocent gaiety, Martin the baker has served Him better than you who have sought salvation by prayer and penance or your brother Manuel who glories in the women and children he has killed and the thriving towns he has left in desolate ruin.”<sup>15)</sup>

(「神の道は測り知れぬものです。神の眼には、その勤勉で正直な生活と、愛情あるやさしさと、無邪気な快活さをもったパン屋の Martin が、祈禱と苦行によって救済を求めるあなた様や、自らが手にかけてた女、子供によって、自らが廃墟と化せしめた繁栄せし都市によって神の栄光を讃えようとする弟御の Manuel 様より、より良く神に仕えたものと映ったとしても、何の不思議がありません。』)

神は人間の弱点に寛大であり、この世界をかくも美しく造ったのは、人間が楽しむことが出来るように考えられたからである。

“Would He have given the stars their glory, the birds their sweet song and the flowers their fragrance if He had not wished us to delight in them?”<sup>16)</sup>

(「もし神が我々にそれを楽しませたいと思召さなかったら、なんで神は星にその輝きを、小鳥にその甘美な歌を、そして花にその芳香をおあたえになったのでしょうか。』)

こういった考え方は、Maugham の短編集 *Cosmopolitans* の “The Judgment Seat” のなかにも見られる。

John, Mary, Ruth という三人の人間が神の前で最後の審判を待っている。John と Mary とは幸福な夫婦であったが、美しく純な Ruth があらわれるに至り、二人の愛は空しくも崩れ去るのである。John と Ruth はパオロとフランチェスカのように愛し合うが、二人とも「永遠の生命」を信じて、傷心の思いで別れを告げる。その結果、三人とも自分達の払った自己犠牲のためにかたくなな人間になってしまう。

不滅の神は彼等の告白を聞くと、“Go to hell.” という言葉が口に出掛ったが、ふっと息を吹いて三人を完全に抹殺してしまう。

神は哲学者に次のように云う。

“I have often wondered why men think I attach so much importance to sexual irregularity. If they read my works more attentively they would see that I have always been sympathetic to that particular form of human frailty.”<sup>17)</sup>

(「わしはよく不思議に思うのだが、何故人間どもは性の無軌道さをわしがそんなに重要視していると考えるのだろうか。もしもわしの造ったものをもう少し注意して読みとってくれたなら、とくにこの種の人間の弱点にはいつもわしが同情を寄せてきたということがわかりそうなものだが。)

Maugham が主張するのは「神の御名」という美名にかくれて、自分達の心の狭さや、頑固さを正当化しようとする人間の醜さや偽善を神は許されぬということであろう。

最後に、Catalina は恋人 Diego と障害を越えて結ばれ、彼女自身は名高い女優になるのであるが、これが彼女の本性に適しく、しかも、善行へつながる道だからである。

“They who write plays and they who act them deserve our love and esteem, for they serve the good of the commonwealth.”<sup>18)</sup>

(「芝居を書く人々、そして芝居を演じる人々はわれらの愛と尊敬に値いするのじや。なぜならば、彼らは公共の利益に貢献しているからじや。)

これは芸術は一部の選ばれた人のためではなく、一般大衆のものであり、同時に善行に導かれなければならないという Maugham の主張である。

Art, unless it leads to right action, is no more than the opium of an intelligentsia.<sup>19)</sup>

(芸術は、もしそれが正しい行為に導かれなければ、知識階級の麻薬にすぎない。)

かくして、Catalina にみられる常識とユーモアをもった神のイメージと人

間の善意、善行への礼讃は *The Summing Up* において Maugham の主張する善の理論と一致するわけである。

Maugham は人間が人生は無意味であるということを認めたがらず、その意義のない人生を意義あるかのように思わせる三つの絶対的価値を考え出したと主張する。

その三つの価値は、真、善、美である。

先ず、真を把握することは不可能であり、それは多くの場合、単なる空名に過ぎない。

美は真に較べて、有利な立場にあるが、相対的なものであり、美を鑑賞するための美的感覚は、人により、時代により変遷するし、また、美は一つのフル・ストップであり、たいくつなものである。

これに対して善は、愛より偉大であり、時の経過を越えて、その喜びや美しさを減ずることなく、その善の過半をしめている 'loving-kindness' (愛情あるやさしさ) はあらゆる人に理解出来るものである。

Maugham は善こそ絶対的価値であり、この世での唯一の實在と考える。

Goodness is the only value that seems in this world of appearances to have any claim to be an end in itself.<sup>20)</sup>

(善こそ、この假象の世界において、それ自体目的であると主張することの出来る唯一の価値である。)

しかも、この善は「正しい行為」の中にだけ示されるものである、と Maugham は云う。

では「正しい行為」とは何か。

これに対し、Maugham は 16 世紀の神秘思想家、Fray Luis de Leon の言葉を引用している。

The beauty of life, he says, is nothing but this, that each should act in conformity with his nature and his business.<sup>21)</sup>

(彼は云う、人生の美とは各自が自己の性質と本分に従いふさわしく行動することに外ならないと。)

Maugham は「われわれの行為がわれわれの全人格から出てくるとき、行

為が全人格を表わしているとき、行為が全人格との間に、ときに作品と芸術家との間にみられるような、はっきりいいがたい類似をもつとき、われわれは自由なのである」と主張する哲学者 Henri Bergson に同意しているとも考えられる。

「正しい行為」に至るためには、自己の発見、認識、そして完成というプロセスを踏むことが必要なわけだが、これに不可欠なのは、深淵な哲学的知識や理想主義ではなく、もっとプラクティカルな知恵、すなわち ‘common sense’ と現実に対する鋭い分析力と共感、そしてユーモアのセンスであると Maugham は考えるのである。

ユーモアについては、彼は、人がそれをもつことにより人生のみじめさや空しさ、そして人間の愚かさや醜さを、より耐えやすくすると考える。

Humour teaches tolerance, and the humorist, with a smile and perhaps a sigh, is more likely to shrug his shoulders than to condemn.<sup>22)</sup>

(ユーモアは寛容を教えるものであり、諧謔家というものは、他人をとがめるよりは、微笑と、そしておそらくは溜息について、肩をすくめるものである。)

## II

私は、これまで Maugham の主な小説を、彼の ‘common sense’ に重点をおいて、年代順に考えてきたわけであるが、*Liza of Lambeth* から *Of Human Bondage* に至る作品では、主として真実を、*The Moon and Sixpence*, *The Painted Veil*, *Theatre* 等の作品では美という理念を、*Cakes and Ale* から *The Razor's Edge*, *Catalina* に至る作品では、主として善という理念を追求してきたとも考えられる。

もちろん、はっきり断定してしまうことに危険がないわけでもなく、個々の作品をみても、真、善、美という絶対的価値が微妙に組み合されて追求されている場合も多いし、また、年代順に真、美、善と Maugham が意識的に追求してきたわけでもない。例えば、*Cakes and Ale* と *The Razor's Edge* の間には審美的な *Christmas Holiday* があるし、また、*The Razor's Edge*

から最後の小説 *Catalina* に至る作品の間には *Then and Now* といった、やはり審美的傾向の強い作品もあるわけである。

だが、概括的に彼の小説をとりあげるとき、彼の作品の展開は、年代を追って、真、美、善という三つの絶対的価値の追求と、その認識であると考えることが可能であろう。

そして善こそ絶対的価値であり、實在であるとする彼の結論には、常識という一本の太い線が通っていることになる。

Maugham は善意という心情的なもののもろさに、ある一定の方向と強さを与えるものが、常識であり、この両者が結合され、初めて善という絶対にちかずき得ると考えたのであろう。

だから、彼の作品中でキャラクターにおこる悲劇は、知性や善意や才能の不足というより、この常識の欠如によっておこるのである。

Maugham 自身の人生模様を考えてみると、彼の作家としての成功は、まさに、彼の常識と意志力のお蔭である。

幼くして両親を亡くし、牧師の叔父の家で育てられた彼が、肉体的コンプレックス——どもりと背の低さ——を克服したのも、彼の 'will-power' と同時に、彼の常識であった。

また、医学の勉強をしながら *Liza of Lambeth* を書いて、作家として生きることを決心したのも、小説よりも戯曲の方が名を上げるのに手っとり早いと考え、*Lady Frederick*, *Mrs. Dot*, *Our Betters* 等の作品を次から次へと発表し、名声と共に金も手に入れたのも、この実践的知恵のなさしむるところである。

I had found out that money was like a sixth sense without which you could not make the most of the other five.<sup>23)</sup>

(金というものが第六感のようなもので、それがなくては、他の五感をフルに利用出来ないということに私はすでに気がついていた。)

しかも、成功するや、彼は 'self-complacency' の危険を早くも悟るのである。

But the greatest danger that besets the professional author is one



that unfortunately only a few have to guard against. Success.<sup>24)</sup>

(しかし職業作家につきまとう最大の危険は、不幸にして、ごく少しの人しか用心する必要のないもの、すなわち成功である。)

劇壇が自分を最早求めていないことを知ると、Maugham は劇作を止め、今度は、再び小説と短編小説に手をそめ、これにも見事成功するが、これも彼の意志力、自己洞察の鋭さ、現実を分析する能力と実践的知恵、常識の賜物である。

さらに、Maugham の常識は、文学は一部の人のものであってはならず、大衆のための文学であるべきだと主張する。

It should have a widely interesting theme by which I mean a theme interesting not only to a clique, whether of critics, professors, highbrows, bus-conductors or bartenders, but so broadly human that its appeal is to men and women in general; ...<sup>25)</sup>

(テーマはひろく興味のあるものでなければならない。私がここで興味あると云うのは、ある一つの徒党、例えば批評家、大学教授、知識人、バスの車掌やバーテンといった人達に興味あるだけでなく、その訴えが一般の男にも女にもわたる程ひろく人間一般に関するテーマという意味においてである。)

Maugham が話を「…」で終らせるより、フル・ストップで結ぶのを好んだということも、また、その結果 James Joyce や Virginia Woolf によって代表される同時代の作家の「意識の流れ」を用いた小説に逆行して、ストーリーを重視したのも、彼が世紀末的審美主義の洗礼を受けたとか、或いは、彼がフランスに生まれて Maupassant の影響を受けたとか説明出来ようが、要は、小説家としてより Maugham その人の常識が新しい試みを受けつけなかったということであろう。

The story the author has to tell should be coherent and persuasive; it should have a beginning, a middle and an end, and the end should be the natural consequence of the beginning. The episodes should have probability and should not only develop the theme, but grow out of the story.

The creatures of the novelist's invention should proceed from their characters ; ...<sup>26)</sup>

(作家が語ろうとする物語は首尾一貫して説得力のあるものでなければならない。つまり、それには初まりと中間と終りがあり、その終りは初まりの必然的帰結でなければならない。挿話は本当らしく思えると同時に主題を展開させるだけでなく、話の筋から自然に生まれ出てこなければならない。

小説家の作り出す人物はそれぞれの性格に由来するものでなければならない。)

Maugham のこうした小説論にも彼の常識が顔を出していると考えられる。

彼の大衆のための文学といった心境は、Klaus W. Jonas にあてた Maugham の手紙に読みとることが出来る。

The most pleasing compliment I have ever received came from a G. I. in the last war who was stationed in New Guinea; he wrote to tell me that he had greatly enjoyed a book of mine that he had been reading because he had never had to look out a single word in the dictionary.<sup>27)</sup>

(私が今まで受けとった最も快い讃辞が此の間の戦争でニューギニアに駐屯していたアメリカの兵隊から参りました。その手紙の内容は彼がたった一語も辞書で引く必要がなかったため、私の本を非常に楽しく読んだということでした。)

以上、Maugham が模索、探究した結果、達した実在は善であり、善を目標とする「正しい行為」に不可欠なのは常識であったわけであるが、Maugham は何故これほどまで常識を高く評価したのか。

これを解明するためには、Maugham の人となりによりまできかのぼる必要がある。

Maugham の生涯を振り返り、彼の人となりを考えてみると、彼はデュプレックスであったと云えよう。

彼のどもりや背の低さといった肉体的なものに対する劣等感とフランス生

まれであり、幼くして親なし子となった、いわゆる環境からくるコンプレックスと、一方彼の家系に対するプライドと意志力、彼本来の感じ易く熱情的、審美主義的、理想主義的性格と、それに対する意識的に造られた冷静で、現実的で、シニカルな性格<sup>28)</sup>、これに加うるに解放された‘homo liber’たらしとする芸術家としての Maugham とそれをセーブしようとする社会人、常識人としての Maugham、こういった複雑な対立する要素は、外見的には調和をたもっているように思われるが Maugham が年をとるにつれて、彼の内部で分裂する。

*Cakes and Ale* のなかの Edward Driffild が「成功した作家」という假象のなかに閉じこめられたと同じように、Maugham も文壇のモニュメント的存在としての宿命からは遁れることは出来なかった。次第次第に彼の創作能力は衰え、常識人 Maugham が優勢を占めてくる。

こう考えてくると *Somerset and all the Maughams*<sup>29)</sup> や *The Two Worlds of Somerset Maugham*<sup>30)</sup> に述べられている晩年の Maugham の悲惨さ、挫折感や孤独といったものを理解できるように思う。

‘I’ve been a failure.’ he stammered. ‘The whole way through my life I’ve made mistake after mistake. I’ve had a wretched life. And I’ve made a hash of everything.’<sup>31)</sup>

(「僕は失敗者なんだ。」と彼はどもりながら云った。「僕は僕の人生においてずっと失敗に失敗をかさねて来たんだ。僕はまったくひどい生活を送ってきたんだ。おまけに、僕はすべてを台なしにしてしまったんだ。)」

もちろん、これは老年のくり言とも考えられようが、私には Maugham の常識性、あるいは俗物性といったものに対する彼自身の悲惨なまでの嫌悪感といったものが感じられるのである。

こう考えてくると、皮肉な云い方ではあるが、Maugham があれほど執拗に常識といったものを高く評価したのも、いわば、自己弁護にすぎないとも云えよう。

では、最後に Maugham の考える常識とは如何に定義し得るかという問題に入ろう。

Maugham にとって、常識とは、善意という心情的なものに方向づけを与え、「正しい行為」に不可欠なものであった。哲学的に考えれば、これは、17世紀の思想家 Claude Buffier が「自我とは別に非我として存在するものを知るために ‘sens commun’ が必要である」と主張した ‘sens commun’ であろう。

Common sense he defined as “that disposition which nature has placed in all or most men, in order to enable them, when they have arrived at the age and use of reason, to form a common and uniform judgment with respect to objects different from the internal sentiment of their own perception, which judgment is not the consequence of any anterior judgment.”<sup>32)</sup>

(彼が定義する常識とは、「自然があらゆる、もしくは大多数の人間に与え、人間が丁年に達し理性を使用出来るようになったとき、その人間の知覚の内的状況とは異なる外的対象に関して、何ら先行的判断の結果ではない共通で一律的な判断をくださることが出来る気分」ということである。)

それは、あらゆる人々に与えられ、博学の士も無学な者も、哲学者も日雇労働者も、それに関しては、同じレベル上に立っているとも云える。それは ‘gesunder Menschenverstand’ であり、あらゆる国と時代に承認されるものである。

Maugham は常識のもっ平凡さ、健全さ、共通性、恒常性、特にその実践性を高く評価するのである。それは Maugham にとって ‘good sound practical sense; combined tact and readiness in dealing with every-day affairs of life.’<sup>33)</sup> (生活の日常の出来事を手ぎわよく、しかも敏速に処理してゆくすぐれた健全で実践的思慮分別) でもあった。

こうした常識は Maugham が主張するように、人の行動の基礎となるが、一面、あくまでも保守的意見であり、先入観念でもある。特に Maugham の場合は、自己弁護ということ意識しすぎたためか、あまりにも常識を誇大評価しすぎ、これが Maugham の芸術家としての燃焼を不完全にし、いわゆる ‘hard, gemlike flame’ で燃えることを不可能にしたとも考えられる。

常識こそ Maugham が広い読者層を獲得出来たチャーム・ポイントであっ

たわけだが、同時に Hamlet のセリフのもじりではないが「モーム君、この世の中には、常識では考えられないものがあるんだよ。」といった常識といった「わく」を越えたより深くより高いものが不足していたように思われる。ここに、常識とユーモアをもって人間を、そして人生を理解した、あるいは、せざるを得なかった Maugham 文学の魅力と同時に、決定的限界があると考えられる。

(昭和 43 年 4 月 13 日受理)

註 Maugham の作品は Heinemann のものを使った。

- 1) *The Summing Up*, 1938, pp. 264-268.
- 2) *Liza of Lambeth*, 1897, p. 112.
- 3) *Mrs. Craddock*, 1902, p. 135.
- 4) *Of Human Bondage*, 1915, p. 316.
- 5) *Ibid.*, p. 716.
- 6) *The Moon and Sixpence*, 1919, p. 162.
- 7) *The Painted Veil*, 1925, p. 233.
- 8) *Cakes and Ale*, 1930, p. 201.
- 9) 拙稿「お菓子とビール——假象と眞実」——『旭川工業高等専門学校研究報文第 4 号』参照。
- 10) *The Narrow Corner*, 1932, p. 273.
- 11) *Theatre*, 1937, p. 293.
- 12) *Christmas Holiday*, 1939, p. 231.
- 13) *The Razor's Edge*, 1944, p. 229.
- 14) *Ibid.*, p. 251.
- 15) *Catalina*, 1948, pp. 114-115.
- 16) *Ibid.*, p. 112.
- 17) *The Complete Short Stories*, Vol. I, 1951, pp. 316-317.
- 18) *Catalina*, p. 220.
- 19) *A Writer's Notebook*, 1949, p. 296.
- 20) *The Summing Up*, p. 303.
- 21) *Ibid.*, p. 305.
- 22) *Ibid.*, p. 66.
- 23) *Ibid.*, p. 112.
- 24) *Ibid.*, p. 179.
- 25) *Ten Novels and Their Authors*, Mercury, 1963, p. 12.
- 26) *Ibid.*, p. 12.
- 27) Klaus W. Jonas ed.: *The World of Somerset Maugham*, Peter Owen, 1959,

- Preface p. 10.
- 28) 拙稿「月と六ペンス—Strickland の世界」—『北海道英語英文学第 11 号』参照。
- 29) Robin Maugham: *Somerset and all the Maughams*, Longmans. Heinemann, 1966, p. 40. ‘Suddenly Willie lowered himself on to the sofa and buried his face in his hands. He began to cry with long racking sobs.’ Maugham の甥である著者は彼の老年の孤独感について語っている。
- 30) Wilmon Menard: *The Two Worlds of Somerset Maugham*, Sherbourne Press, 1965, Maugham の足跡を追求した労作であり、モデル問題など扱っているが、Maugham の老年に対する嫌悪感といったものも描かれている。359 頁には “Yes, growing old is a very ugly and dirty business!” という彼の言葉がある。
- 31) Robin Maugham: *op. cit.*, p. 196.
- 32) *Encyclopaedia Britannica* の 1963 年版より引用した。
- 33) *O.E.D.* より引用した。

## 参 考 書 目

## [作 品]

- The Collected Edition*, 22 vols., Heinemann.
- The Complete Short Stories*, 3 vols. (1951).
- The Collected Plays*, 3 vols. (1952).
- First Person Singular* (1931).
- Encore* (1952).
- The Vagrant Mood* (1952).
- Points of View* (1958).
- Purely for My Pleasure* 画集。(1962).
- Looking Back*, Show 6~8 月号に連載の自伝。(1962).
- Ten Novels and Their Authors*, Mercury (1963).
- Selected Prefaces and Introductions of W. Somerset Maugham*, Doubleday (1963).
- The Making of a Saint*, Farrar, Straus & Giroux (1966).
- 1898 年に出版されたが絶版になっていた作品。
- A Maugham Twelve* (1966).

## [参 考 文 献]

- Richard Aldington: *W. Somerset Maugham*, Doubleday, 1939.
- John Brophy: *Somerset Maugham*, Longmans, 1952.
- Klaus W. Jonas: *The Maugham Enigma*, Peter Owen, 1954.
- K. G. Pfeiffer: *Somerset Maugham, A Candid Portrait*, Victor Gollancz, 1959.
- K. W. Jonas: *The World of Somerset Maugham*, Peter Owen, 1959.
- Richard Cordell: *Somerset Maugham*, Heinemann, 1961.

- Wilmom Menard: *The Two Worlds of Somerset Maugham*, Sherbourne Press, 1965.  
 Robin Maugham: *Somerset and all the Maughams*, Longmans. Heinemann, 1966.  
 Garson Kanin: *Remembering Mr. Maugham*, Atheneum, 1966.  
 Beverly Nichols: *A Case of Human Bondage*, Secker & Warburg, 1966.  
 M. K. Naik: *W. Somerset Maugham*, University of Oklahoma Press, 1966.

## [そ の 他]

- 中野好夫編 『モーム研究』英宝社.  
 上田 勤編 『モーム』研究社.  
 後藤武士, 増野正衛編 『モーム研究』新潮社.  
 上田 勤 『現代英国作家論』研究社.  
 朱牟田夏雄編 『サマセット・モーム』研究社.  
 後藤武士 「W. Somerset Maugham とその小説——一人称小説を中心として」——『英文学研究』XXVI, 2 (1949).  
 相良次良 「W. Somerset Maugham の思想的骨髄——*Catalnia* について」——『英文学研究』XXVIII, 1 (1952).  
 後藤武士 「Maupassant と Maugham」——『英文学研究』XXXII, 2 (1956).  
 中野好夫他 「モーム特集」——『英語研究』LV, 3 (1966年3月).  
 朱牟田夏雄他 「モーム特集」——『英語青年』CXII, 4 (1966年4月).  
 ホルブルック, ジャクスン 『イギリス世紀末文学』小倉多加志訳, 千城書店.  
 George Sampson: *The Concise Cambridge History of English Literature*, Second Edition, 1965.  
*Encyclopaedia Britannica* (1963年版).